

## 情報探索能力と認知能力の関係

中井 仁美

近年の情報環境の発達に伴い、多様な情報源へのアクセスと情報の取得が可能となってきた。特に学校教育において、情報に関わる様々な技能を育成する必要性が指摘されてきた。1998年には、「情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて」において、「情報活用能力」が新たに提言された。2008年には、中央教育審議会答申において、「社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項」の1つとして「情報教育」が挙げられた。そうした状況の中で、情報探索能力が他の能力とどのような関係にあるのかは必ずしも明らかになったとは言えない。そこで本研究では、情報探索能力と認知能力の関係を明らかにすることを目的とする。

本研究では、①情報探索能力の調査、②認知能力の調査、③「情報活用の実践力尺度」を用いた質問紙調査を行った。①は、インターネット上で特定の情報を探す課題を作成し、情報探索させ、正答数による評価を行った。②認知能力の調査として京大NX15検査とN-CABを行った。京大NX15検査は、数的因子、空間的因子、言語的因子、記憶力という4因子、N-CABは処理速度、記憶力、空間把握、推理能力という4因子に対し、それぞれ評価する。③は、高比良らが作成した「情報活用の実践力尺度」を用いて質問紙調査を行い、収集力、判断力、表現力、処理力、発信・伝達力という6因子に対し評価を行った。①、②、③の結果について、それぞれの能力の相関係数を算出し、因子分析を行った。調査対象者は21歳から51歳の男女27名で、調査期間は、2018年10月24日から2018年11月22日である。

調査の結果、情報探索能力は、京大NX15検査の第7検査、第12検査、情報活用の実践力の処理力、創造力と有意な正相関が見られた。京大NX15検査と情報活用の実践力尺度の間には、空間的因子と処理力、記憶力と判断力、発信・伝達力にそれぞれ正の相関が見られた。情報活用の実践力尺度の判断力とN-CABの処理速度、記憶力にそれぞれ正相関があることが明らかになった。また、各調査において評価項目は複数存在し、1つの調査内に多くの相関関係が見られることが明らかになった。また、因子分析の結果から、情報探索能力と処理力は主に第1因子と第3因子で説明されることため、情報探索能力と処理力は同じ能力を背景に持つ能力同士と捉えることができる。情報探索能力と数的因子、空間的因子、言語的因子は第3因子でほとんど表現できることから、必要な情報を的確に探す力と言語や概念に対する理解である結晶性知能は、関係が深いと言える。

調査の結果から、情報探索能力は情報活用の実践力や結晶性知能などの様々な能力と関わりあって存在する能力であるといえる。そのため、学校教育で情報探索能力の指導を行う際には、生徒一人一人に合わせ、今回正相関が見られた能力の中で比較的能力の低い部分を補うような教育をすることが重要であると考えられる。

(指導教員 池内淳)